

与那原恵『首里城への坂道 鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像』 (筑摩書房、二〇一三年)を読む

今 林 直 樹

はじめに

首里城。いうまでもなく沖縄第一の観光名所である。

筆者が初めて首里城を訪れたのはもうかれこれ十数年前のことになる。守礼門から歓会門、瑞泉門、漏刻門、そして「万国津梁の鐘」を左手に見ながら広福門をくぐると左手に真っ赤な奉神門が見える。この奉神門をくぐると目に飛び込んでくるのが赤を基調に鮮やかに彩られた首里城正殿である。守礼門から正殿へと至るこのルートからは正殿をみることができず。そのため、突如として目の前に現れる正殿の姿は見る者に強いインパクトを与える。かつてこの地に都をおき、独特の文化を花開かせていた琉球王国を訪れた人々は色鮮やかで堂々とした正殿を前にしてその威容に打たれたことであろう。

では、琉球王国を治めていた国王とはどのような人物であったのであろうか。幸いにも私たちは歴代琉球国王(第二尚氏王統)の肖像画を、一部ではあるが、目にする事ができる。

「御後絵」と呼ばれるその絵は、残念なことに先の沖縄戦で焼失してしまったため、私たちが見ることができているのはその写真

のみである。それらは正殿に向って右手にある南殿の廊下に掲げられている。明・清王朝期の中国皇帝から贈られた皮弁冠と皮弁服を身に纏った国王が正面を向き、周囲に家臣団がひかえるスタイルの御後絵は国王の死後に制作されたものであるが、国王がまるで生きてそこにあるかのように、それぞれが表情豊かに個性的に描かれている。では、この貴重な写真を撮影したのは誰であらうか。その人物こそ本稿で取り上げる与那原恵著『首里城への坂道』(以下、本書)の主人公、鎌倉芳太郎である。

著者の与那原恵氏はノンフィクション作家である。氏が鎌倉芳太郎という人物に関心を持ったのは、沖縄が、戦後二七年間に及んだ米軍統治時代に終止符を打ち、日本復帰を果たした一九七二年に開催された「五〇年前の沖縄」写真でみる失われた文化財」展がきっかけであった。同展は、当時の琉球政府立博物館とサントリ―美術館の共催で開催された、琉球王国時代の息吹を伝える大規模な写真展であったが、そこで公開された約四〇〇点にも及ぶ写真を撮影したのが鎌倉であった。当時、中学二年生であった著者は父君と同展を鑑賞しているが、そのときのことを著者は本書の「あとがき」で次のように記している。

首里城、円覚寺の山門、赤瓦がつらなる首里の町並み。

大きなパネルに引き伸ばされ、白と黒のコントラストがきわだつ圧倒的な写真。南国の湿気や匂いまでも感じられるような写真は父は一点一点じいっと見つめ、言葉を発することもできずにいるようだった。かつて彼に身近にあった風景のな

かに、じぶんやしたい人が写っているのではないかと探しているようにも思えた。(本書三九六頁)

この展覧会で自分の幼い頃の首里をまざまざと思い出したようであった著者の父君は、展覧会からの帰宅後、思い出話を著者にとめどなく語ったという。こうして著者は鎌倉芳太郎という名前を知ることになったのである。その後、一九八二年、鎌倉が八四歳の時に刊行した『沖繩文化の遺宝』(論考篇と写真篇の二冊)に接した著者は、父君といっしょに観た写真との再会を嬉しく思い、展覧会での父君の表情がよみがえってきたという。こうして、鎌倉のことが気になっていた著者が、鎌倉のことをきちんと調べてみようと思いついたのは今から十数年前のことであった。これも著者の言葉で確認しておこう。

あるとき、沖縄県立図書館に、〈鎌倉ノート〉の一冊だけがコピーされておさめられていることに気づいたのが、すべての始まりだ。それは鎌倉のもっとも初期のノートで、はじめの宮古・八重山調査を記録したものだ。几帳面なペン文字でびっしりと書かれた記録と精緻なスケッチ。何か、すごいものに接してしまった、というのが第一印象だ。書く、というよりも、彫り込んでいる、といった雰囲気を持たせようとするノートだ。このノートを二十代なかばの青年が書いたとは信じられない。ノートには、私も大好きな宮古や八重山の民謡の歌詞が多く記録されているのだが、その精確さ

にもびっくりした。どこまでも歩いてゆく足、すべてをみつめる目、すぐれた耳。いったい、この人は何者だろう。(本書四〇〇頁)

こうしてノンフィクション作家として鎌倉芳太郎の人生を追う著者の旅が始まったのである。

ここで本書の特徴について、思いつくままにまとめていきたい。

第一に、本書は鎌倉芳太郎の本格的な伝記であるということである。とりわけ、著者が「あとがき」で「どうしても知りたかったのは、鎌倉が下宿した座間味ツルのことだった」と書いているように、座間味ツルをはじめとする座間味家の人々と鎌倉とのつながりが実に丁寧に調査され、しっかりと書かれている点は、鎌倉に関する他の論考には見られない、本書の最も重要な点であろう。著者はツルをはじめとする座間味家の人々が「(鎌倉)にとつてきわめて重要な人物にちがいないというカンがあつて、座間味家につらなる人を捜しもとめた」と書いているが、まさにノンフィクション作家としての著者の「汗え」をみてとることができよう。

第二に、本書の副題が「鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像」とあるように、近代沖縄から戦後沖縄へと続く時代に生きた数多くの人びとを活写している点である。思いつくままに挙げて、本書には「沖繩学の父」と呼ばれる伊波普猷やその師である田島利三郎、歴史学者の真境名安興や東恩納寛惇、ジャーナリス

トにして沖縄の民俗や文化に関する研究家で、鎌倉にも大きな影響を与えた末吉麦門冬、仙台出身で八重山諸島の石垣島測候所に赴任し、その第二代所長として台風の研究にあたった岩崎卓爾、「八重山研究の父」と言われた喜舎場永珣、当時、建築界の権威であり、取り壊しが決まっていた首里城を鎌倉とともに救うことになる東京大学教授の伊東忠太、戦後、米軍統治下の沖縄における琉球政府最後の主席で、沖縄の日本復帰を実現した屋良朝苗、沖縄戦でいわゆる「ひめゆり部隊」を引率し、戦後は琉球大学教授として琉球方言研究にも多大な功績を残した仲宗根政善、そして琉球王家の血をひく王族の一人で、琉球文化の保存や紹介にも大きな功績をあげ、沖縄戦のさなかにこの世を去った尚順など、沖縄につながる多くの人々が登場する。本書に登場するこうした数多くの人びとを通じて、私たちは「近代沖縄」という時代を体験することができるのである。

第三に、「琉球文化」とは何かという問題意識の共有である。本書で著者は鎌倉芳太郎を評して『『琉球文化』全般の最高のフィールドワーカー』であるとし、「彼以上に、琉球と対話し、観察し、記録した人間はいない。沖縄本島各地、宮古・八重山・奄美の島々をくまなく歩き、琉球のすべてをとらえようとした彼がテーマとしたのは、芸術、文化、歴史、民俗、宗教、言語など、幅広いことも、ほかに例をみない」と記している。著者にとって鎌倉の人生を追うことはすなわち「琉球文化」を追うことであった。著者は「私たちは、『琉球文化』をどう定義すればよいのだろう」と自問し、そこに「とりあえずそれを、

さまざまな文化を取り込みながら、独自に昇華した文化」という暫定的な回答を与えらるとともに、続けて「人びとのいとなみのなかではぐくまれた英知が伝承され、そのときどきに生きた人びとの証をあざやかに残すもの。琉球文化とは、過ぎ去った膨大な時間と現在の『対話』そのもの」との意味づけを行っている。「琉球文化」というキーワードから沖縄の歴史を考えるとき、「琉球文化」は幾度となく消滅の危機にぶつかっている。よく言われるように、一六〇九年の薩摩の島津氏による琉球侵略、一八七九年のいわゆる「琉球処分」とその後の近代日本への包摂、そして一九四五年の沖縄戦は、琉球文化の変容や消滅の危機として代表的な歴史的事実である。しかし、著者は、鎌倉の人生を通して、「琉球文化は」歴史の流れから一時断ち切られたとしても、あたらしい時代の人たちに思いがあれば、ふたたび息を吹き返すこともできる。ゆたかな芸能のかずかず、美しい工芸文化、首里城がそう語っている」と記し、琉球人や近代沖縄の人びと、そして鎌倉芳太郎がそうした役割を果たしたという思いを持っている。こうした著者の思いは鎌倉の人生を追ううちに出来上がっていったものであるうし、それらは本書に記されている琉球王国時代の外交文書集である『歴代宝案』をめぐるエピソードや、大正十二年に取り壊し直前の首里城を鎌倉が救ったというエピソード、そして鎌倉が撮影した数多くの写真のガラス乾板が鎌倉自身によって大切に保管されていたというエピソードに、見事に表れているといえるであろう。鎌倉が撮影した大量のガラス乾板を、鎌倉が先の戦争のさ

なかに防空壕の中で必死に守ろうとしている場面で、著者は次のように記している。

その防空壕に、鎌倉は沖繩で撮影した大量のガラス乾板を保管したのだった。大正期から昭和初期にかけて撮影したガラス乾板は、展覧会などで展示したもののほか、千数百点があったが、一点一点のあいだに紙をはさみ、何重にも布でつつみ、いくつもの茶箱（内側にブリキ板が貼ってあり湿気をさけるのに適していた）におさめられた。これを防空壕に入れると、そのぶん家族の居場所もせまくなるが、何としても貴重な史料を守らなければ、という鎌倉のつよい意思、それを理解した妻・静江によって、王国時代の面影を残す写真などが守られるのだ。（中略）これらを守る義務がじぶんに課せられていると考えていた。「琉球」と「沖繩」をむすぶもの、それがガラス乾板に残されており、これを守らなければ歴史が断ち切られてしまう、そんな悲痛な思いであったのかもしれない。（本書二六六～二六七頁）

ここに記した鎌倉の思いは「琉球文化」に対する著者の思いでもあったにちがいない。

ところで、本書のタイトルは『首里城への坂道』であり、本書の書き出しが「首里は坂の町である。」となっていることから明らかなように、「坂」は本書の重要なモチーフになっている。坂は人が行き交う場であるとともに、上り坂と下り坂が

あり、坂の頂点がその転換点となっていることから人生にもたとえられるものである。本書は大きく沖繩戦以前（プロローグから第六章）と沖繩戦を含めたそれ以後（第七章からエピローグ）に分けることができるが、第六章の最後とエピローグに印象的な坂の記述がある。第六章最後に描かれる坂の記述は、時代が大きく変わろうとするその前夜を暗示する場面に現れる。著者は次のように記す。

首里の坂道は、変わらないままで。

坂の上から人がやってきて、あいさつを交わし、鎌倉は坂をのぼってゆく。そのかたわらに碧い海がきらめく。木々の緑の葉がそよぐ。坂の上には美しくなった首里城がそびえている。守礼門もかつてのすがたにもどった。王国崩壊から時がすぎたけれど、思いをこめて、じっと見つめていれば、そこに琉球人たちのすがたはあらわれる。

東京に帰ったら、座間味ツルに首里城が修理されたことを話して聞かせよう。妻の静江や息子の秀雄にも、沖繩で出会った人たちや、調査と研究にあげくれた日々をひとつひとつ語ろう。このさきも、王国時代の建物の修理がなされるだろうし、やがて琉球の時代がすこしずつ息を吹きかえしてゆくにちがいない、そう思ったのではないだろうか。（本書二五五頁）

そして、「鎌倉の沖繩訪問はこれが戦前さいごとなる。彼が

ふたたびこの地を踏むのは、三十五年後だ。昭和十二年七月、日中戦争がはじまる。」という文章で第六章を閉じるのである。エピソードでは次のように坂が描かれる。

プラットホームに立つと、海からの風がやさしく感じられ、坂の町をみつめていけば、そこに二十代の鎌倉芳太郎が歩いているように思える。今日も紺の着物に袴をはいた彼が、ぎゅっと口をむすび、真剣なまなざしで坂道をのぼっているのではないか。(本書三九四頁)

遠い過去と現在がつながり、未来へとつづくゆるやかな坂道。鎌倉が歩いたのは、そんな美しい坂道だ。さまざまな表情をして、いろいろな語る人たちが通りすぎ、立ちどまり、考え、また歩き出す。

風に吹かれてプラットホームから空を見上げる。坂のうえに首里城のすがたがチラリと見える。赤い城は、陽の光によってさまざまな表情を変え、朝の淡い光のなかではおだやかに微笑をたたえているようだし、真昼には乱反射した光のなかではずんでいるようだ。陽が落ちるころオレンジ色に染まり、やがて濃紺のなかにとけてゆく。(本書三九五頁)

第六章の最後では穏やかな時代から凄惨な戦争の時代への転換点として、エピソードでは著者が鎌倉の人生を描き切ったそのラストシーンとして、それぞれに坂が描かれる。どちらも強

く印象に残る場面である。エピソードでは、引用した文章の後、著者は本書を「だけれど、いまはこのまま赤い城を見たい。」という文で締めくくっている。読者は、首里の坂を上る鎌倉の姿や行き交う人々の姿、そして赤い首里城を思い浮かべながら、最後の「いまはこのまま赤い城を見ていたい。」という文に、なんともいえないさわやかな余韻を感じながら、本書を閉じるのである。

最後に次のことは記しておかねばならないだろう。すなわち、それは今日の私たちへの著者からの警鐘である。それは戦争の時代を記した第七章に現れる。

戦争の時代は、世相が一気に黒一色に塗りつぶされるわけではないが、時の経過とともに身動きができない状態になってゆく。いつのまにか灰色の日常に慣れ、しだいに黒色がましていることに気づいても、こらえ性ができてしまう。目や耳をつきさす勇ましい言葉にさえ慣れるものだ。恐怖が支配する社会を生きるために、姿勢をひくくして、口をつぐみ、この異常な日々をやりすごすしかない。それが当時のおおかつた日本人だったが、二十一世紀のいま、そうなったとしても、そんなふうにはならないといいきることができらるだろうか。(本書二六一頁)

この著者の警鐘は当時の日本人が主体的にとった行動という書き方となっているが、そういうように行動せざるをえない時

代を作った政治というものがそこに表裏一体となっていることはいうまでもない。「そんなふうにならないといいきることができるか」という問いには「いや、できない」という答えが用意されている。私たちはこの問いを深刻に受け止めなければならぬ。

以上、本書について思いつくままにまとめてきた。本書を読みながら初めて沖繩を訪れたときのことを思い出した。国際通りのホテルからバスに揺られて長い坂道を登りながら首里城を訪れたこと、短いながらも趣のある坂道である首里金城町の石畳を歩いたことなど。たしかに首里は坂の町である。あらためてそう感じた。今度また首里を訪ねることがあれば、坂道を登りながら人びとの行き交う姿をみてみたいし、沖繩の長い歴史に思いを馳せ、その歴史にどっぷりと浸りながら首里の坂道を登ってみたい。そして、沖繩の過去と対話しながら、沖繩の現在、そして未来について考えていきたい。

本書は今日の沖繩、そして日本を考えるためにもぜひ一読してほしい書である。